

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370408

研究課題名(和文) 晋宋における博物地理認識と文章表現

研究課題名(英文) Knowledge of Encyclopedias, Geography, and Written Expression During the Jin and Song Dynasties

研究代表者

大平 幸代(OHIRA, Sachiyo)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：90351725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：晋宋期には、各地で美しい山水が発見され、多くの詩人が山水をテーマとした詩歌や散文を書いた。本研究では、主に荆楚地方の地志について考察し、次の二点を明らかにした。第一に、晋の羅含『湘中記』以降、山水の美とその神秘性が記述され始め、後の地志に大きな影響を与えた。美しい山水は、神境と見なされ、不思議な現象が起こる場所だと考えられた。第二に、地志の記録は、『異苑』『搜神後記』等の志怪小説集にも収録されているが、山水美よりも出来事の不思議さが強調され、次第に変容したさまがうかがえる。

研究成果の概要(英文)：During the Jin and Song Dynasties, beautiful landscapes were discovered in various locations, and many poets composed works in the form of poems and prose on the theme of landscapes. This study primarily examined local choreographies from the Jing-su region and clarified the following two points. First, Luo Han of the Jin Dynasty began to describe the beauty and spirituality of landscapes in his work Xiangzhong-ji, which significantly impacted later choreographies. Beautiful landscapes were viewed as part of the spiritual realm and were believed to be locations in which strange phenomena existed. Second, stories from choreographies were reproduced in Yiyuan, Soushen-houji, and other collections of strange stories, but these emphasized the mysterious character of specific events over the beauty of the landscapes and the content of the stories was altered.

研究分野：中国文学

キーワード：六朝 地方志 志怪 山水

1. 研究開始当初の背景

本研究は、地域の風土・山水への関心の高まりにともなって変化した、東晋～劉宋期の地方文人の著述活動について明らかにしようとするものである。

研究代表者は、これまで、詩賦や軼事小説の考察を通して、晋宋期の文人が地理空間をどのように認識し、いかに表現しようとしたのか、を明らかにしようとしてきた。その過程で、地理(空間)認識のありかたとその表現方法を探るには、地方志の研究が不可欠だと考えるに至った。東晋以降、南朝では数多くの地方志が編纂された。その編者の多くは、学者や能文の士であり、当時少なからぬ影響力をもっていた。だが、伝存する詩文が少ないため、後世、文学史上さほど注目されてこなかった。よって、彼らの著述活動を考察することにより、当時の文学のあり方を再考することができる。さらに、地方志編纂の場を想定することにより、当時の地方文人の活動を探り、志怪や山水遊記などへの広がりを考えることができるだろう。

地方志の編纂については、近年、胡宝国氏・永田拓治氏をはじめとする日中の歴史研究者による研究が進んでおり、特に、「先賢伝」「耆旧伝」などの政治的社会的意味や、地方名士による家伝の執筆状況が明らかにされている。一方、文学研究においては、小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』(岩波書店、1962)が山水遊記について論じ、富永一登「六朝志怪の文体 『異苑』を中心として」(『古田教授退官記念中国文学語学論集』東方書店、1985)に志怪と地方志との関係を指摘して以降、大きな進展はない。

なお、山水地理を考える際には、宗教的要素にも注意を払う必要がある。廬山における山水文学については、曹虹「慧遠及其廬山教団文学論」(『文学遺産』2001年第6期)、劉苑如「懐仁山林 慧遠集团的廬山書写与实践」(『体现自然 意象与文化实践』中央研究院中国文哲研究所・文学与宗教研究叢刊、2012)等のすぐれた専論があり、宗教思想、学問、詩文創作の関係を考える上で参考になる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、晋宋時期の地域文化の諸相、とりわけ地方文人(当地に赴任した者も含む)の著述活動のあり方を探ることにある。その土地固有のモノ・事象、さらに山水の記述を通して、風土・風俗を表現することは、晋宋期に盛んにおこなわれるようになった。仙境探訪や廟墓での怪事の記録も増加する。山水中の怪異の記録は、地方の隠士や官吏の文化活動と密接なかかわりを持ち、当時流行した山水詩や山水遊記ともゆるやかな繋がりをもっている。

対象地域としては、まず、長江中流域の要衝であった荊州からはじめ、水路による交通が盛んであった湘州、江州へと広げていく。荊州を中心とする楚地方の文化と、建康および呉地方との比較検討を行い、その差異や影響関係を明らかにすることを目指す。

また、本研究期間およびその後の研究を通して、地方文人の文筆活動のあり方(人やジャンルの交錯)を探求することを目指す。そのため、まずは、地方志のなかの神怪描写と志怪書、別伝、家伝とのかかわり、すなわち各ジャンルの書物がいかに影響しあっているか、語り(記録)が変容してゆくのかを、具体的事例をあげながら提示したい。また、それぞれの書物の編纂者(或は編纂を命じる者)の人的ネットワークについても究明していきたい。

3. 研究の方法

(1) 地方志の輯佚と考証

劉緯毅『漢唐方志輯佚』(北京図書館出版社、1997)〔清〕王謨輯『漢唐地理書鈔』附:〔清〕陳運溶《麓山精舍輯本六十六種》(中華書局、1961)を基礎としながら、晋宋時期の荊楚の地志を整理する。先行研究の闕を補うため、佚文を丹念に校訂しながら、各書の性質や特徴を考察する。

(2) 地方志と志怪書の比較検討

地方志には、山中や廟墓での怪事が多く記される。一方、志怪書には、地方志にもとづくと思われる美しく神秘的な山水が記録される。両者を比べることにより、一つの場所がどのように認識され、記されているのか、或は地方志と志怪書でどのような書き分けがあるのかを考察する。

比較の対象とする志怪は、主に、『搜神後記』『異苑』『幽明録』等、東晋末から劉宋にかけて編纂された書とする。これらの書には、具体的な地名や時期を伴った記事が散見され、地方志と来源を同じくすると考えられる。

さらに、後世の地理書を参照することにより、よく知られた逸話が別の場所と結びつき、その地の出来事として伝承されていくさまを明らかにする。

(3) 文人の移動と地理記述の検討

本研究で注目する文人の移動には、大きく分けて二つある。一つは、地方の太守となったり、刺史の府僚となったりして未知の土地に赴任する場合。もう一つは、北伐に従って北方の事物を見聞する場合である。

前者については、王文進「州府雙軌制對南朝文學的影響 以荊雍地帶爲主的觀察」(『南朝山水與長城想像』里仁書局、2008)に、府官に他州の者を任用できたことが、南朝文人に広く各地の山水を跋渉する機会をあたえ、ひいては山水詩の発展にも影響を与

えたという指摘がある。本研究では、地方志の編纂における山水美の発見に重点を置いて、考察を進める。山水詩と異なるのは、地方志には、地域の歴史伝承を語る古老や怪事を目撃する野夫の存在が不可欠な点である。さらに地域の名族の影響も大きい。よって、地方志の考察によって、地域ごとの風土や歴史文化に対する認識のしかたを、より多元的に理解することができると思う。

後者については、森鹿三「劉裕の北伐西征とその従軍紀行」(『東洋史研究』第3巻第1号、1937)に北伐の実態を明らかにする資料として、その意義が論じられている。本研究では、郭縁生『述征記』『続述征記』や戴延之『西征記』の考察を通して、晋宋革命前後における中下級文人の役割や著述活動のありさまを明らかにする。

4. 研究成果

従来、地方志の輯佚作業は行われているが、文字の校訂や類話の指摘など詳細な検討はなされていない。研究代表者は、複数の佚文を比較検討するとともに、地名、人名、逸事などについて史書や志怪書、後世の地理書等を用いて考証を行った。これにより、地方志だけでなく、これまで指摘されてこなかった類書や志怪書の文字の校訂を行うこともできた。こうした基礎作業の上に、次の論考を執筆し、国内外の学術雑誌やマレーシア、香港、台湾の国際学会で発表した。

(1) 荊州地志の整理と考察

羅含『湘中記』、袁山松『宜都記』、王歆之『南康記』『始興記』『始安記』、雷次宗『豫章記』、鄧德明『南康記』、盛弘之『荊州記』を中心に、地志の中において山水や神怪がいかに記されているかを検討した。

また、王歆之『神境記』の考証を通して、当時の地方官による地理書編纂の実態の一例を示した。『神境記』は、嘗陽郡・九疑山(湖南省)の地理を記したものであり、その編纂が舜廟祭祀と深い関わりをもつことを明らかにした。『神境記』は、祭祀をつかさどる地方官の探訪記であり、それゆえに当時流行した山水遊覧とは異なる視点と写実的な描写を獲得したと考えられる。(雑誌論文)

(2) 地方志と志怪の関わり

地方志のなかに現実の土地と結びついた仙境が記されるさま、志怪書のなかで地域の伝承が変容してゆくさまを考察し、次の三編の論考を発表した。

東晋から劉宋にかけておこった山水ブームの中で、人跡稀な悪道や人を迷わせる山水の美に関心が集まる。その美は神性を伴っており、険阻な山中を闊歩する道士や隠士、神仙の域に迷い込む民の逸話が地方志にも

記録されはじめる。一方、志怪書の中の仙界訪問譚にも、地方志に記された実際の山中の様子が反映される。例えば、『幽明録』にみえる劉晨と阮肇がたどった山中の道のりは、孔靈符『会稽記』等の記述と符合する。山水の美とそこに付加された伝説は、地方志編纂者と志怪編纂者、そしてそれを楽しむ山水愛好者それぞれにとって少しく異なる意義をもちつつ、実景と仙境との融合を進めていったと考えられる。(雑誌論文)

西晋の張華は博学の士として知られるが、そのイメージの増幅と固定にも、東晋時期の地方文化(地方志の編纂を含む)が関係している。張華のイメージは、本来、晋の重臣であり人材活用に長けた政治家的側面と、『博物志』の編者としての博物学者的側面の両面から成り立っている。そして、そこに雷次宗『豫章記』に記された雷煥との逸話が加わることによって、志怪書にみられる術士的な張華像に変容していったと考えられる。(雑誌論文)

陶淵明「桃花源記」を地志中の神境の系譜の中で、読みなおした。主にとりあげた地志は、羅含『湘中記』、王歆之『神境記』、袁山松『宜都記』の三書である。地志では、山水の美と「野人」が目撃した怪異によって、その地が「神境」であることが表現される。また、漁師や樵は神境のルールを知り、そこに住むことを許された人(或いはその子孫)として記される。「桃花源記」の桃源郷発見は、地志の神境発見に類似するが、再訪不可能であるという一点において、地志の記述とは大きく異なる。陶淵明は、地志の「神境」を模倣することによって、自身の理想とする空想の「人境」を創りあげるとともに、そこが実在しない幻想の空間であることを示したのである。(学会発表、本稿については、今後、改稿のうえ論文として発表する予定)

(3) 北伐の記録

劉裕の第二次北伐時に編纂された『西征記』『述征記』等の編者および内容について考察し、それら従軍遊記が東晋から宋への禅讓革命にどのような役割を果たしたのかを明らかにした。また、従軍の途上で行われた詩宴に注目し、謝靈運や謝瞻らの戯馬台での詩作が、劉裕政権に高門士族が重用されていく画期となる出来事であることを指摘した。(雑誌論文)本論稿ではさらに、従軍記を記す文人層と、セレモニーの際に詩文を作る文人層(主に王氏謝氏などの高門貴族層)との役割分担と相互作用により晋末宋初の文学が形成されていた様子を示した。ここを出発点として、今後、劉宋期における中下級文人の著述活動について考察を進める予定である。

(4) 冢墓の記録

魏の文帝曹丕が編纂を命じた『皇覽』は、類書の嚆矢だとされる。この魏『皇覽』の性

質については先論に詳述されているが、その後の受容については十分に論じられていない。『皇覽』は、劉宋時代に二度にわたって再編纂されている。編者は、何承天と徐爰で、両者とも礼学と史学の権威である。また、現存する佚文の大部分が「冢墓記」の記事（その他は「逸礼」）だと考えられる。そこで、劉宋期の再編纂とそれ以降の利用における「冢墓」の学の重視について考察し、その背景として劉宋期の墓に対する文人の関心の高まりを指摘した。晋末の北伐の際には、北方の冢墓の位置や墓室の装飾などが詳細に記録され、廟や墓の修復や祭祀も行われた（その背後には、禅譲を計画する劉裕側近の政治的思惑があった）。また、冢墓の形態や副葬品に通じていることが博学のしるしとして尊重された。ところが、齊梁時期になり、冢墓の学が重んじられなくなるのと対照的に、詩文の典故集として『皇覽』の中の情緒的な故事が目されるようになる。学問的興味の変遷とともに、『皇覽』の意義も変容したのである。（雑誌論文）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

太平幸代、《皇覽》の流傳與劉宋“冢墓”之學、古典文獻研究、査読有、第 20 輯下巻、2017、pp.107-120

太平幸代、張華“博物”故事之背景 試探六朝“博物類志怪小説”與地理書之關係、第十一屆馬來西亞漢學國際研討會論文集、査読有、2017、pp.67-86

太平幸代、劉裕の北伐をめぐる文学 晋宋革命を演出した人とことば、古代学、査読有、9 号、2017、pp.76-63
<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/4502>

太平幸代、悪道・迷路・弦歌 晋宋期の方志・志怪における山水と神仙の境、未名、査読有、33 号、2015、pp.1-27

太平幸代、『神境記』攷 劉宋期の地志における山水の記録、叙説、査読無、第 42 号、2015、pp.29-49
<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/3984>

〔学会発表〕（計 3 件）

太平幸代、人境與神境 《桃花源記》與晋宋時期荆湘地志之關係、中古文學與漢學研究工作坊（臺灣・國立清華大學）2017

太平幸代、《皇覽》の流傳與劉宋“冢墓”

之學、中國文學研究新視野：文本的流傳與閱讀（香港城市大學）2017

太平幸代、張華其「博物」故事的背景 兼論六朝志怪書與地理書之關係、The Eleventh Malaysian Sinology International Conference（第十一屆馬來西亞漢學國際研討會）（マレーシア）2015

〔その他〕

莫砺鋒著、緑川英樹・太平幸代訳注、『莫砺鋒詩話』「相思」訳注、颯風、第 57 号、2018、pp.58-75

莫砺鋒著、緑川英樹・太平幸代訳注、『莫砺鋒詩話』「隣人」訳注、颯風、第 56 号、2017、pp.60-70

莫砺鋒著、緑川英樹・太平幸代訳注、『莫砺鋒詩話』「娘」訳注、颯風、第 55 号、2016、pp.63-79

莫砺鋒著、緑川英樹・太平幸代訳注、『莫砺鋒詩話』「子供」訳注、颯風、第 54 号、2016、pp.41-50

莫砺鋒著、緑川英樹・太平幸代訳注、『莫砺鋒詩話』「花」「孝」訳注、颯風、第 53 号、2015、pp.36-60

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太平 幸代 (OHIRA, Sachiyo)
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号：90351725